



Title	朝顔のジャポニスム : 園芸と工芸と文芸
Author(s)	橋本, 順光
Citation	a+a 美学研究. 2017, 11, p. 196-209
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/90147
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

朝顔のジャポニスム

——園芸と工芸と文芸

序 朝顔と千代の俳句

「朝顔に釣瓶とられて貰い水」という俳句がある。朝方、井戸で水を汲もうとして手桶を見ると、朝顔がからみついていて。そんな朝顔をとりよけるには忍びず、近所に頭を下げて水をもらうことになってしまった。江戸時代の加賀に住んでいた千代が、そんな自分自身の経験を詠んだ句として、逸話とともに広く知られている。ただ、俳句としての国内の評価はさして高くなかった。例えば正岡子規は、「この句は人口に膾炙する句なれども俗気多くして俳句とはいふべからず」と酷評した。朝顔に釣瓶を取られたという描写で止めるべきであって、「貰い水」のようは説明や情愛の表現は蛇足というのである^[1]。そもそも千代は千以上の句を残したが、いまでもって言及される句は朝顔以外にはほとんどない。息子を亡くした悲しみを詠んだとされる「蜻蛉釣り今日はどこまで行ったやら」にしても、今日では千代の作ではないとされている^[2]。

たしかに戦前において千代は中等教育を中心に数多くの教科書で登場したが、俳句に親しませることを意図した導入の教材が中心か、良妻賢母といったあるべき女性像の定着を全面に出した道徳的教材が中心だった^[3]。これらは実のところ、経歴の不確かな千代について都合良く作り上げられた虚像であったが、千代を広く知らしめたのは、女Ⅱ母としての慈愛を強調した教科書群の存在が大きかったといつてよいだろう。例えば一九二八年生まれの手塚治虫が『ブラックジャック』の一話「もらい水」（一九七八）の冒頭でこの句を引用し、医者の子の手狭な家で居候する老母が友人宅を転々とする姿に、近所に水の無心を頼む千代と重ねるのも、戦前の千代像を忠実に踏襲しているといえる。

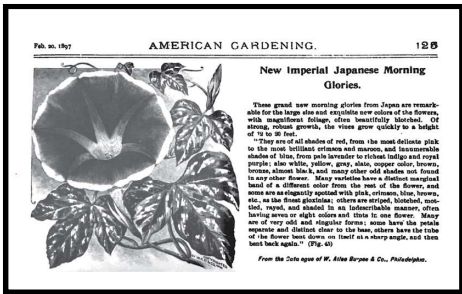
対照的に国外では、特に英語圏において千代の朝顔の句は、代表的な俳句として長く認知され、多くの文献で肯定的に紹介されてきた。これは野口米次郎や鈴木大拙などによる英文論考で、しばしば言及されたことも大きい。これはまた一八八〇年代以降、ジャポニスムの流行のなか、アメリカを中心に朝顔のデザインが工芸作品にしばしば登場したこととも関連づけられるだろう。本論では、園芸と工芸、そして文芸、特に俳句のジャポニスムに注目しながら、朝

図1

日本の朝顔の新種を伝える

『アメリカン・ガーデニング』誌

1897年2月20日号の記事



顔の句をめぐる彼我の受容を探り、その流行の消長をたどりたい。

米国における朝顔の流行

日本の朝顔を主題にした工芸品は、一八八〇年代のアメリカで数多く誕生している。代表的な例は、ルイス・C・ティファニーの花瓶や鉢、それに皿だろう。半透明なガラスに、青や赤色の大輪の朝顔が蔓とともにあしらわれ、涼しげな印象を与える。ほかにも朝顔の花の形をそのままグラスにしたもの、あるいはティーセットなど、とりわけ女性の使用を念頭に置いた食器において珍しくはなかった¹⁾。これは、当時の中産階級の女性が園芸をたしなむことを期待され、その際に朝顔が人気だったことの現れだと考えられよう。

特に一八九〇年代には、大輪の朝顔がアメリカで人気となる。朝顔は英名をモーニング・グローリーといって、世界各地に同類はあるものの、どれも花が小さかった。それが同時代の日本で、品種改良と朝顔人気により、大輪の花が容易に入手できるようになったのである。花の大きさと美しさ、そして何よりも種さえ入手すれば、室内で鉢植からでも容易に花が咲く手軽さなどから、日本の朝顔は当時の米国の園芸雑誌で人気の花として頻繁に登場する²⁾。大輪の種を郵送する通信販売の広告がしばしば見られ、その流行を「過熱する朝顔人気」と名付ける記事まで書かれたほどであった³⁾。そもそも朝顔が米国に移植されたのは、一八六三年に、種の輸入と通信販売で知られるL・W・グッデルが手がけて植えたのが始まりだという⁴⁾。生態系や生物多様性という概念がほとんどなく、むしろ積極的に有益な外来種を移入することがよしとされた時代である⁵⁾。丈夫で成長の早い朝顔は、同じく日本産である葛と並んで、土がむき出しの庭や日除けがほしいポーチやヴェランダにびっつりの植物として重宝されることとなった⁶⁾。ただ、朝顔の種を扱う業者には、悪質な例もあったらしい。送られた種が発育しなかったり、別の花が咲いたりといったトラブルが読者投稿欄で報告され、善後策や方法が指南されるなど、朝顔をめぐる記事は当時の園

芸雑誌の誌面を賑わせていた⁷⁾。そんな米国での人気を日本の業者も聞き及んだのだろう、一八九四年には英文で朝顔について的小冊子が刊行され⁸⁾、どうやら米国の主な出版社に手紙とともに送られたようだ。例えば一八九五年三月号の『レスリー誌』には、同書が送られてきたとして簡単な紹介とともに、日本まで一ドルを添えて送れば、その英文ガイドと主な二〇種類の朝顔の種を郵送してくれるらしい、と東京の日本橋にあった住所が記載されている⁹⁾。こうした日米の朝顔の人気を仲立ちし、さらに加速させたのが、米国の旅行作家エリザ・シドモアである。彼女は日本旅行記『人力車に乗った毎日』(一八九二)以降、しばしば日本を訪問し、なかでも東京の入谷での朝顔市にはいたく感銘を受けた。そこでシドモアは、明治の朝顔熱について詳しく取材し、豊富な図版とともに「すばらしい日本の朝顔」という記事を寄稿した。当時の代表的な雑誌『センチュリー』の一八九七年一二月号である。中国原産の種を独自に発展させた点で、「菊よりも朝顔の方が日本固有の花である」として¹⁰⁾、朝顔をめぐる博物誌的な知識を織り交ぜながら、いわば日本のフラワー・ショーとして朝顔市を紹介したのであった。記事のなかでシドモアは、千代の朝顔の句を英訳とともに紹介し、秀吉が朝顔を見に来るといので、あえて庭の朝顔を摘ませて、茶室にのみ一輪を生けてうならせたという千利休の逸話についても言及している。

朝顔は江戸時代から変種や大輪を競うことが流行していたが、明治になって再びの人気となる。園芸愛好家や関連業者により各種団体が日本各地で作られ、専門雑誌も刊行された。その際には、奇抜な、つまり、一見したところでは朝顔に見えないような変化朝顔がしばしば尊ばれた。このようにおよそ米国とは異なった形で流行してきた日本の朝顔を、シドモアは初めて英語圏に紹介したのである。そうした功績に注目され、五年後にはロンドンの日本協会でも朝顔について講演している。それによれば、一八九七年にシドモアが記事を掲載して後、米国から朝顔の種の注文が殺到して、日本での値段が三倍にまで高騰し、元に戻るまで二年もかかったという¹¹⁾。以前から朝顔は米国で人気だったが、シドモアの記事により、折からの人気が加速したことは間違いないだろう。前述した「過熱する朝顔人気」を書いた無名記者も、冒頭でシドモアに言及して記事の内容を詳しく紹介しており、シドモアのロンドン講演を信じるならば、従来から人気の大輪だけでなく、変化朝顔までニューヨークで毎年展示され、人々の耳目を集めるようになったという。値段の高騰はともかくとして、以降、日本への注文も増えたと思われる。多分にシドモアへ情報

や図版を提供したであろう団体の雑誌『あさがほ』では『センチュリー』誌の記事が訳載され、一九〇八年には、日本よりもアメリカの方が朝顔は人気だとして、高額で輸出されていることを伝える記事があるからである^{〔14〕}。

一八九三年以来、米国に滞在していた詩人の野口米次郎が、匿名で『朝顔嬢の米国日記』（一九〇二）という日記体の小説を刊行したのも、こうした朝顔人気にあやかっただけのことであろう^{〔15〕}。朝顔という名前の日本人女性が米国を訪れ、きれいごとだけではないアメリカ社会の現実に直面し、日本のステレオタイプに困惑しながらも、メイドとして職を得る。そんな毎日が、ブロックンで軽妙な英語で綴られるこの小説の原型は、一九〇一年に『レスリー誌』に掲載された。およそ六年前に、日本からの朝顔の英文ガイドを紹介した雑誌である。ピエール・ロティの『お菊さん』（二八八七）を筆頭に、英国のミュージカル『ゲイシャ』（一八九五）など、ジャボニスムあふれる当時の物語において日本人女性はよく植物の名が付けられたが、日本でおよそ一般的でない朝顔という名の主人公は、自分のことは棚に上げて米国で描かれた日本人女性がおよそ現実離れしていることをしばしば指摘する^{〔16〕}。ただ日本を代表する花はお菊さんの「菊」ではなく、「朝顔」にほかならないという点で、『朝顔嬢の米国日記』はシドモアの記事を裏書きしているともいえるだろう。千代の句と利休の逸話も、それとなく小説で言及されている。小説の冒頭で、朝顔は金比羅に米国行きについて祈願をした帰り、水を飲もうと井戸に釣瓶を下ろした際に、かんざしを落としてしまう。月光の中で広がる波紋に朝顔は、いわば神の許しとしての微笑を感じ取り、米国行きの用意を始める。いうなれば、朝顔は井戸から離れて、アメリカへと貰い水に訪れるわけである。そして朝顔は、アメリカで受け取った薔薇の花束を「シンブルな利休」にならって一輪だけ生け、賞賛されることになる^{〔17〕}。まさに朝顔の種がアメリカの土に根付き、開花するようにして、朝顔嬢は米国社会に順応・帰化する（naturalize）と要約できるだろう。

千代の朝顔の句とその受容

では、こうした朝顔への人気と千代の句はどのように交錯したのであろうか。そもそも千代の句を最初に英訳

したのは、日本学者として名高いバジル・ホール・チェンバレンである。その『口語日本語ハンドブック』（一八九九）では、芭蕉とともに千代の俳句が紹介されている^{〔18〕}。朝顔の句を‘Having had my well-bucket taken away by the convolvuli, gift-water!’と、二行程度で直訳した後、およそこれでは意味をなさないため、詳しく内容を説明したのであった。このチェンバレンの英訳と紹介を作り替え、千代の句を広く英語圏に知らしめたのが、英国の詩人エドウィン・アーノルドである。その『海と陸』（一八九二）で、チェンバレンと同様にローマ字で千代の句を引用したあと、単語のみ‘Convolvulus/Bucket taking/I borrow water’と直訳し、アーノルドは、以下のように釈明しながら、さらにそれを脚韻がそろった詩へと改作したのであった。

こうした写真のような簡潔さは、日本人なら耳だけで理解し、心から楽しむことができる。情景と思いが閃光のように一瞬で音楽を奏でて鳴り響き、心の奥にまでしみ通るからだ。しかし、これを西洋人の耳と理解に届く形にすると、この日本語の詩は、少なくとも以下のような長さにまで拡張しなければならぬ。

朝顔	The Morning Glory,
その葉と花が巻き付いてしまった	Her leaves and bells has bound
私の手桶のまわりに	My bucket-handle round.
この手をちぎることはできない	I could not break the bands
あの柔らかな蔓の	Of those soft hands.
手桶と井戸はもう朝顔のもの	The bucket and the well to her I left.
取られて私は頼む、水をください、と	Lend me some water, for I come bereft ^{〔19〕} .

こうして謎を解くようにして、短い直訳からわかりやすく紹介された千代の句は、慈愛と感傷という十九世紀的な価値観を体现する女性像という点で親しみやすさも手伝ってだろう。俳句を紹介する英語圏の文献には必ずといって



図2 |

ジョウジー＝ル＝ロワ窯

(エルネスト・シャブレと推定)の〈ガーデン用置物「井戸に朝顔」〉
(1889頃) 三菱一号館美術館

図3 |

加藤友太郎〈色絵朝顔文手桶形花生〉

東京芸術大学大学美術館

よいほど登場することとなった^[24]。前節で言及したシドモアの記事で紹介された千代の句も、アーノルドの訳であることは文中で注記されている。となると、すでにティファニーなどが展開していた朝顔を描いた工芸品に続いて、千代の俳句を組み合わせた作品が出現しても驚くには足りないだろう。フランスのショワジー＝ル＝ロワ窯(エルネスト・シャブレと推定)の〈ガーデン用置物「井戸に朝顔」(二八八九頃)「図2」は、千代の句をふまえるかもしれないと指摘されているが^[25]、年代から考えるならやや早すぎるため、人気の朝顔をあしらっただけという可能性がある。一方で、ふまえているとすれば、作成年代が少し後のことなのかもしれない。むしろ確実なのは、海外に人気の陶芸を多く作成した加藤友太郎による〈色絵朝顔文手桶形花生〉「図3」だろう。ちょうど米国での流行にあやかっ、日本の朝顔愛好家が輸出にいそしんだように、この作品は、そんなアメリカでの評判を見越した輸出工芸と考えられるからである。

一方、俳句の翻訳をめぐることは、アーノルドの『海と陸』から四年後に、『帝国文学』誌上で論争が起こった。カール・フロレンツによる俳句のドイツ語訳に対し、上田万年が俳句の簡潔性が十分に生かされていないと短評を述べ、フロレンツ本人が反論したのであった。論争によくあることではあるが、両者はすれちがいのまま終わった。上田はフロレンツの訳を冗長と考えたのに対し、フロレンツは詩の形が異なるものである以上、説明的になるのは避けられないと考えていた。ここで注意したいのは議論の是非ではなく、翻訳の限界ゆえに俳句の訳出には説明が不可欠ということなら、すでに日本の専門家ではないアーノルドによって理想的な形で記されていたことである。アーノルドは、一瞬で情景と感情を切り取る俳句に感嘆しつつ、それを英語で説明するのは、五倍以上の文字が必要なることをユーモアとともに見事な改訳によって示したのであった。

こうしたアーノルドによる俳句紹介に際しての保留を無視して、上田万年そのままに、あまりに訳が冗長だと批判したのが、かつて『朝顔嬢の米国日記』を書いた野口米次郎である。野口は、一九一四年に英国で日本の詩について講演し、アーノルドの六行詩を引き合いに出して、説明と描写が多い西洋の詩と、一瞬で特徴と風景を切り取る俳句とを対比した。アーノルドは、まさに野口のいう俳句の美点を認めており、たと

え意味の通じない戯れであるとはいえ、直訳も併記していたにもかかわらず、アーノルドが俳句を六行に翻訳したかのように述べたのであった。それに対して、野口は自身が英訳した千代の句「The Well-bucket taken away / By the Morning Glory / Alas, water to beg」を披露し、両者を対照しようとした^[26]。ただ、結局、最初にチェンバレンが行った英訳とよく似た形式と内容に退行してしまっており、野口がその『日本の詩の精神』(一九一四)で行った断片性と構築性の対照については、すでにアーノルドが行ったことの二番煎じにしかなくなっているといわざるを得ない。

ただ注意すべきなのは、野口がその直後で続けて、アーノルドの訳文について絵画を比喻にして対比していることである。つまり、アーノルドは「和紙に墨の筆で描かれた日本画を万年筆で模写するようなもの」だというのだ。そもそも墨を含ませた筆で一気に呵成に描いた絵と、万年筆で幾度も描き込んだ緻密な絵という対比は、英語圏での日本美術論でしばしば見られた。例えばラフカディオ・ハーンは、ストレンジの日本美術論に答える形で「日本美術の顔」(二八九七)という論考を執筆した。ストレンジが、日本美術における風景や動植物の表現を賞賛し、その英国への影響(つまりはジャポニスム)を特筆したものの、顔についてはきわめて稚拙ということを書き添えたからである。ストレンジのみならず英国でもしばしば見られたこの論調に対して、日本美術の特質は、線や色で緻密に描くのではなく、少ないながらも効果的な線で特徴を捕らえるところにあることをハーンは強調したのだった。その点で、動植物の表現も人物表現も実は同じであること、ひいてはそれは古代ギリシャの壺絵などの線描にも通じると述べたのである^[27]。

興味深いのは、こうした日本美術評が、E・P・ヒュースを経由して日本の絵画教育に間接的に影響を及ぼした点であろう。ヒュースは、女子教育のために活動していた英国の教育者で、一九〇一年、安井てつの招きにより、北アメリカを視察の後に日本を訪れた。東京のみならず、地方も積極的に講演と視察で訪問し、滞在は一年以上もの長きに渡るなど、女子教育のみならず、絵画教育にも無視できない足跡を残した。当時の日本では、初等絵画教育の重点を伝統的な毛筆か西洋的な鉛筆に置くかで議論が揺れていたが、その際に、日本画の「特質は最少き線を用いて、十分に其意味を画き出さんとするにある」と述べたヒュースが大いに刺激となり、毛筆への重視に弾みがかかったというのである^[28]。むろん、ヒュースの来日を過大評価はできないが、日本美術の利点として、最小限の線で対象の特

(前頁) | 図4

『尋常小学新定画帖第五学年 教師用』(文部省、1910年)より
朝顔の「写生」とその「便化」=デザイン化の例

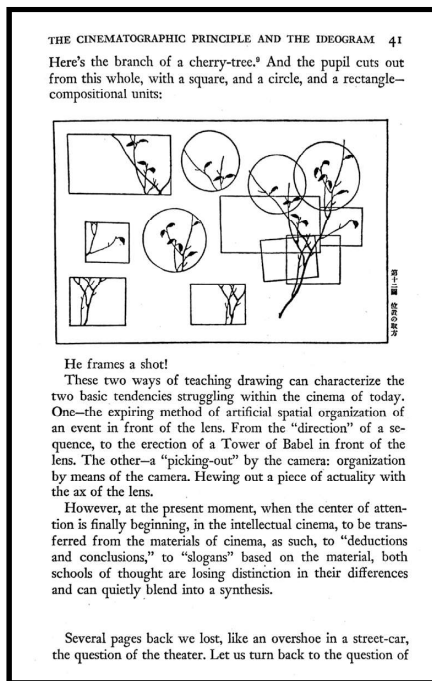
(前頁) | 図5

エイゼンシュテインが引用する尋常小学新定画帖の図

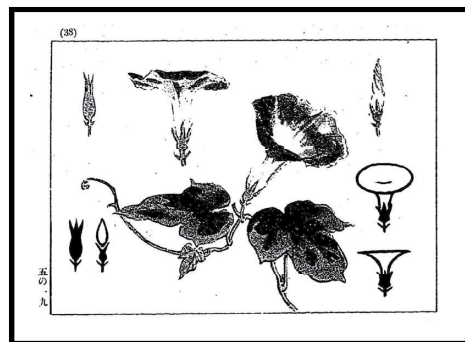
した「地下鉄の駅で」はその好例といえよう。「人混みのなかで、ふと露わになったいくつもの人の顔／黒く濡れた枝に張りついたいくつもの花びら (The apparition of these faces in the crowd; Petals on a wet, black bough)」と、そこでは二つの情景が、比喩であるとも記されず、どのようにつながるのかも説明がなく、ただ並列されている。こうしたモンタージュなり、イメージを中心にした詩法の場合、チェンバレンやアーノルドが半ば冗談に披露した説明の少ない直訳の方が、皮肉にも評価されることになる。事実、当然とはいえ、パウンドもエイゼンシュテインも、千代の句にはなんら注目も言及もしていない。モンタージュやショットになぞらえるような俳句評価において、千代の句は、ちょうど正岡子規が「俗気」と称する情感と説明が過剰ということなのだろう。代わりに、とりわけパウンドが好んで以降、しばしば引用されたのは、当時、荒木田守武の作と伝わっていた「落花枝に返ると見れば胡蝶かな」であった^[26]。つまり、野口の講演は、俳句の受容が大きく変貌し、千代の朝顔の句自体の評価も変わろうとするなかで、言及されたことになる。異国趣味的な関心や、女性的な愛らしく儂いものへの哀惜といった感傷的な趣味が退潮し、一瞬を写真のように切り取り、最小限の表現で最大限の効果を生もうとする形式への関心が高まりつつあったともいえるだろう。

そうした衰微の後、千代の朝顔の句に新たな解釈を添えて再び注目を集めたのが、鈴木大拙である。大拙は、「禅と日本人の自然への愛」(一九三二)で、白居易の『放言』にみる「松樹は千年なるも終に是れ朽ち、槿花は一日なるも自ずから榮と為す」を英訳して、その槿花の訳語を朝顔ことモーニング・グローリーとしている。それからそうした槿花一日の例として、千代の句を説明とともに「My bucket's carried away/ By the morning glory/ And I beg for water」と英訳して、千代は朝顔の存在に自然の真と美を見出し、だからこそ朝顔を取りよけるに忍びなかったのだと解説するのである^[27]。一日で萎れてしまう花に一種の聖なる存在の顕現を読み取る指摘を、以降も大拙は繰り返すことになるが、それが戦後の一九五〇年になると、東洋的な自然観の一例として千代の句に言及するようになる。

その名も「朝顔」(一九五〇)という論考で、朝顔にではなく「朝顔や釣瓶とられて貰い水」というヴァリアントの方の千代の句を「Oh, morning glory!/ The bucket taken captive/ Water begged for」と英訳し、大拙はここに千代は朝



5



4

徴を表現することが可能という評価は、ハーンの「日本美術の顔」と共通しており、何らかの形でハーンの影響が考えられよう。ヒュースは帝国大学でのハーンの講義を聴講しており、それが無断であったことから、二人には埋めようのない溝ができてしまうのだが、これはむしろヒュースが事前にハーンの著作を読んで関心をもっていた現れと考えるべきだろう。いずれにせよ、ヒュースによって勢いを得た伝統的な日本画教育が盛り込まれて、一九一〇年には朝顔の図版も収める尋常小学新定画帖が完成する「図4」。

この小学新定画帖と野口の『日本の詩の精神』(一九一四)を奇しくも同居させたのが、ソ連の映画監督エイゼンシュテインである。エイゼンシュテインは、一九二九年のエッセイで尋常小学新定画帖から図版「図5」を掲載し、ここにはショットがあると注意を促した。樹木全体ではなく、その一部を切り取ることを教えた新定画帖を、エイゼンシュテインは映画のショットに通じると力説したのである。さらにエイゼンシュテインは、野口の俳句論を引用し、そこにはモンタージュと同じ原理が見られることを指摘している。野口が引用した俳句に言及し、まったく無関係な情景が衝突するようにして並列されることで、俳句は映画のモンタージュにも似た効果を生み出していると感じ、漢字や歌舞伎も同じ原理に基づいているとまで述べたのであった^[28]。

唐突かつ牽強付会にも見えるエイゼンシュテインの説明は、しかし、まったく突拍子もなく現れたものとはいえない。むしろ彼のモンタージュ理論は、すでに始まっていた英詩の革新運動ともいうべきイマジズムと共通点が多く、このエッセイもその延長線上にあると考えられるからである。野口の英国講演とほぼ同時期である一九一三年のロンドンで、詩人のエズラ・パウンドが、俳句として発表

顔という美そのものに驚き、いわば主客一如となっていることを特記する。千代は朝顔そのものとなり、それゆえ朝顔をほらいのけることができなくなったというのである。興味深いのは、こうした自然との主格一如と対照させられているのが、テニソンの詩「壁の中の花 (Flower in the Crannied Wall)」であることだろう。大拙は、この壁に咲く花というミクロコスモスに宇宙というマクロコスモスを見出す視線を、先の「禅と日本人の自然への愛」(一九三二)では東西に共通する精神として肯定的にとらえていたが、ここでは結論が逆となる。壁から花を引き抜き、それを手中におさめて初めて宇宙を知ることができる²⁸と考える詩人の態度に、対象を知るためには主体と客体が分離しなければならないという近代的な科学精神を読み取るのである²⁹。

こうした主格一如の例として、大拙はさらに芭蕉の「よく見ればなずな花咲く垣根かな」を引くのだが、この対比は後に、有名な『禅と精神分析』(一九六〇)でも繰り返され、いわば東洋的な自然観の一例として広く知られることになる。ただしそこでは、テニソンの「壁の中の花」と芭蕉のなずなの句が対比されるのみで、千代についての言及は姿を消している。いみじくも、この頃、千代の句は、英語圏の俳句研究においてあくまで入門的な紹介で言及されることはあっても、代表的な俳人としてはみなされないようになっていく。対照的に特権的な地位を占めていたのは松尾芭蕉であった。例えば一九五六年には、ピーター・ベイレンソンによる『日本の俳句―芭蕉の二二〇の俳句を例に』といった翻訳が登場し、好評により一九六〇年までに第四集が刊行されるなど、米国においても芭蕉はすでに揺るぎない位置を獲得していた。千代の句が、後年の大拙にはあまり登場しなくなり、代わりに芭蕉の言及が増えるのは、それだけ千代が俳句の代表例として知られなくなっていったこととほぼ軌を一にしている。

結 槿花一日の栄光と葛

このように英語圏における朝顔の人気は、朝顔の開花同様に、短いものとなった。丈夫で手軽でありながら、優美な花を咲かせる朝顔は、一八八〇年代以降のアメリカの園芸愛好家の間で熱狂ともいえるほどの流行をもたらしした。

それはティファニーを代表とするような女性の使用を念頭に置いた食器や工芸品に朝顔の図像が使用されていることからもうかがえよう。明治の日本では変化朝顔を中心に独特の朝顔熱が広まったが、そんな日米の朝顔熱を媒介したのは、女性旅行作家シドモアであった。実際、彼女の朝顔紹介の記事以降、米国での人気に当て込んで、種の輸出のみならず、野口米次郎による朝顔という名前の日本人女性が主人公の小説や、折から有名になっていった千代の朝顔の句をふまえる加藤友太郎の陶磁器が続いたのである。

千代の俳句を流布させたのは、チェンバレンの紹介を元にしたアーノルドの翻案によるところが大きい。一九世紀に典型的な感傷的な詩に説明を加えて翻案しつつ、従来の英詩にはない簡潔さと映像性に注目した指摘は、単なる紹介にとどまるものではなく、一九一四年に野口米次郎が英詩と対照して述べた俳句の美点をむしろ先取りするものだった。ただし、パウンドやエイゼンシュテインに見られるモンタージュのように、イメージとイメージを重ね合わせる先駆として俳句を評価する以降の受容において、説明的で感傷的ともいえる千代の句が高くされることはもはやなかった。そうした千代の朝顔の句を、禅の主客一如や東洋的な自然観の一例として解釈しなおしたのが、鈴木大拙である。そこではテニソンの詩が自然を支配する知として対比され、千代の句はさらに芭蕉の句によって補強された。ただかつての俳句の代表例のようにもてはやされた時代が遠くなり、芭蕉が代表的な俳人として認知されるにつれて、大拙の論考からも千代の登場は減り、芭蕉にとって代わられることとなる。

このように英語圏における朝顔と千代の句の流行は儚いものだったといえるが、工芸と園芸と文芸を横断した類をみないジャポニスムの一例であることは特筆してよいだろう。さらには流行にとどまらない俳句への持続的な関心と研究への道を開いた点では、まさに槿花一日のように短いながらも、千年の松にも等しい役割を果たしたといえる。なお付言すると、しばしば二〇世紀初頭のアメリカにおいて朝顔とともに、壁や土地を手軽かつ素早く緑で覆うとして推奨された葛は、一部の州で生物多様性を脅かすほどの広さと早さとで繁茂し、侵略的な外来生物として嫌悪されるにいたっている³⁰。いみじくも鈴木大拙は『日本的霊性』(一九四四)で仏教のインド起源に対して、「朝顔を外国へもっていつて植えると、その年は日本の花が咲くけれども、次の花は花が小さくなって、元来の朝顔に返る」とむしろ風土の重要性を強調した³¹。朝顔は、花も蔓も葛ほど繁殖力が強くなかったため、いわば槿花一日だからこ

流行が去ったあとでも嫌悪されることなく、かつてと同様に一定の人々の目を楽しませつつ、共に広まった俳句同様にアメリカの土地と社会に根づいたのであった。

橋本順光（はしもと・よりみつ）
大阪大学文学研究科准教授。専門は日英比較文学。

註

*1 『子規全集』第四卷（講談社、一九七五年）三五九頁。
*2 藤原マリ子「中等教育教科書にみる加賀の千代女の実容」山口大学『研究論叢 人文科学・社会科学』五五卷（二〇〇五年）、四七頁。
*3 藤原前掲論文、四八頁。
*4 『もてなす悦び展—ジャボニスムのうつわで愉しむお茶会』図録（三菱一号館美術館、二〇一一年）、二四—三〇頁。
*5 ‘A Morning Glory Cult’, *American Gardening*, vol.18 (1897, Dec. 18), p.867.
*6 Margaret E. Campbell, ‘Japanese Morning Glories’, *American Gardening*, vol.18 (1897, May 1), p.320. 確かに山端菜木「明治期博覧会における園芸振興と日本植物ブーム」『近代画説』二三号（二〇一四）が指摘するように、園芸（植物）の輸出は明治日本の国策であったが、後述する葛と共に、朝顔の流行に関しては、米国の仲介者の存在が大きかったといえるだろう。
*7 ブラントハンターが活躍し、茶やコーヒール、ゴムなどが各地に植えられた一九世紀、固有種が多い日本はかねてから植物学者の垂涎の的だった。詳しくは白幡洋三郎『ブラントハンター』（講談社、一九九四年）を参照。
*8 Adaline Thomson, ‘Climbing Vines for the Pergola’, *Suburban Life*, vol.12 (1911, Jan.), p.41; Miller Purvis, ‘A Dollar’s Worth of Seeds’, *Keith’s Magazine on Home Building*, vol.25 (1911, Apr.), p.236. なお葛は一八七六年のフィラデルフィア万博の日本館で初めてアメリカに持ち込まれたが、二〇世紀に入るとC・E・Pleasらが積極的に葛の効用と移入を宣伝して流行したと云う。William Shurtleff & Akiko Aoyagi, *The Book of Kudzu: A Culture & Healing Guide* (Brookline, Autumn Press, 1977), pp.12-13.
*9 例えは前掲のキャンベルの投稿記事は、以下の投稿への回答と助言による。Myra V. Norry, ‘Seedling Morning Glories’, *American Gardening*, vol.18 (1897, Mar. 27), p.230.
*10 Syozo Ninkura (省三、新倉), *A Guide for Cultivations of the Japanese Morning Glory* (Tokyo: Rokumon’ya, 1894).
*11 ‘Literary Memoranda’, *Frank Leslie’s Popular Monthly*, vol. 39 (1895, March), p.384.
*12 Eliza Ruhamah Scidmore, ‘The Wonderful Morning Glories of Japan’, *Century*, vol.55 (1897, Dec.), p.281.
*13 Eliza Ruhamah Scidmore, ‘Asagao (Ipomoea Purpurea), The Morning Flower of Japan’, *Transactions and Proceedings of the Japan Society, London*, vol.5 (1902),

p.216.
丸山宏「明治期における朝顔雑誌の創刊とその展開」『造園雑誌』五七卷（一九九三年）、三三—三四頁。
野口の生涯と著作については堀まどか『二重国籍「詩人」野口米次郎』（名古屋大学出版会、二〇一二年）を参照。
*14 詳しくは橋本順光「茶屋の天使—英国世紀末のオペレッタ「ゲイシャ」(1896)とその歴史的文脈」『ジャボニスム研究』二三卷（二〇〇三年）を参照。
*15 *The American Diary of a Japanese Girl* (New York, Frederick A. Stokes, 1902), p.5, p.132.
*16 Basil Hall Chamberlain, *A Handbook of Colloquial Japanese* (Yokohama: Kelly & Walsh, 1889), pp.453-454.
*17 Edwin Arnold, *Seas and Lands* (New York: Longman, 1891), p.203.
*18 こうした英語圏における俳句受容の文脈で千代が好まれた点について、詳しくは前島志保「再構成される連想体系—西洋における二十世紀初頭までの俳句鑑賞」『比較文学研究』七八号（二〇一一年）の特に二二—四頁の注一八を参照。
*19 『もてなす悦び展—ジャボニスムのうつわで愉しむお茶会』図録、一〇九頁。
*20 Yone Noguchi, *Spirit of Japanese Poetry* (London: John Murray, 1914), pp.49-50.
*21 Lafcadio Hearn, ‘About Faces in Japanese Art’, *Gleanings in Buddha-Fields* (Boston: Houghton Mifflin, 1897), pp.108-109, pp.113-114.
*22 中村隆文『「視線」からみた日本近代：明治期図画教育史研究』（京都大学学術出版会、二〇〇〇年）二〇八頁。
*23 Sergei Eisenstein, ‘The Cinematographic Principle and the Ideogram’, *Film Form* (New York: Harvest Book, 1949), p.41.
*24 詳細は、橋本順光「失われた大陸を求めて—俳句と英詩でマトラハンティス—」英米文化学会編『アメリカ一九二〇年代—ローリング・トウェンティーズの光と影』所収（金星堂、二〇〇四年）を参照のこと。
*25 Daisei Teitaro Suzuki, ‘Zen Buddhism and the Japanese Love of Nature’, *Eastern Buddhist*, vol.7 (1931), p.110.
*26 Richard M. Jaffes (ed.), *Selected Works of D.T. Suzuki, vol. I: Zen* (Oakland: University of California Press, 2014), pp.105-107.
*27 詳しくは前掲の『*The Book of Kudzu*』邦語文献では、浅井康宏『緑の侵入者たち—帰化植物のはなし』（朝日新聞社、一九九三年）を参照。
*28 『鈴木大拙全集』第八卷（岩波書店、一九六八年）六二頁。